

# 附属学校における英語教育の小中連携の試み — 中学生と小学生の合同英語授業の実践の成果と課題 —

The Report of English Joint Class Practices by Attached Junior High School Students and  
Elementary School Pupils of National University:  
On the Results and Issues Arising from That Educational Project

大矢裕子\* 古家貴雄\*\*  
OYA Yuko FURUYA Takao

**要約**：本年2月に附属中学校の2年生と附属小学校の5年生による英語の合同授業が行われた。内容は、買い物についてのスキットを小学生、中学生とで共同して作成し、それをクラス全体で発表し、その内容の聞き取りをすることだが、内容を小学生が理解できない場合には中学生が小学生に教えてあげて、内容の相互理解を図るという活動であった。最後に教師の方で内容質問をして、その質問に小学生、中学生共に答えるということも行った。これらの小中連携の実践から、成果として明らかになったことや残った課題について報告したい。さらに、実践の前提として、一般的な英語教育における小中連携の問題についても議論し、その中で今回のような小中の英語の合同授業の意義づけ等についても取り上げてみたい。

**キーワード**：英語教育実践，小中連携，合同授業，コミュニケーション能力

## I はじめに

現在、国立大学の附属学校についてその存在価値を世間に問うことの重要性が文部科学省等から求められている。その価値の1つが地域貢献や一般的な教育的課題への貢献であろう。またその内の課題の1つが、英語教育であろう。英語教育の課題の1つとしては、小学校英語教育への対処、小学校英語の教科化に対する対応、もっと言えば、小学校英語活動から中学校の英語教育への連携や小中連携の問題が重要だと考えられている。この8月1日にも中央教育審議会の特別部会より、次期学習指導要領の全体像となる審議まとめ案が示された。その中では、英語教育の強化が重要なポイントとなっていた。具体的には、小学校については、「外国語活動」を3年生からに前倒しをし、5・6年からは教科になり、中学校では、原則、英語で授業を行うことになり、小中の英語教育に関わる語彙の学習もその量が増やされることになる等があった。こうした英語教育において、繰り返しになるが、英語教育の小中連携、乃至は小中の間の接続の問題は特に重要な事項であると思われる。そこで、今回、英語教育に関して、小中連携の試みとして、附属小学校と附属中学校との連携事業としての合同授業を試みたが、その実践の試みをこれから本論考で報告してみたい。

II以下では、まず、英語教育における小中連携に関する問題を取り上げ、その議論を通してこの問題に絡む種々の要素について考え、その後、それらを踏まえて、今回の附属小・中における合同授業の概要について述べたい。

\* 附属中学校 \*\* 言語文化教育講座

## II 英語教育における小中連携の問題

佃 (2007) は、まだ、小学校英語が必修化される前にすでに、「小学校教諭として、小学校英語の実践を重ねるにつれ、中学校とのつながりを考えざるを得なくなってきた。」(p. 1) と述べている。その時には、小学校では英語が、「総合的な学習の時間」の中で、あるいは構造改革特別区域、いわゆる特区として行なわれており、それぞれの英語活動の内容や授業時間数には相当のばらつきがあったため、それを受け入れる中学校は、生徒間の英語教育の格差が生じ、そのために両者の円滑な接続が当然問題となると彼女は当時考えたわけである。その後、平成 23 年に小学校に外国語活動が導入され、学習指導要領により教育の目標や内容、さらには指導計画の作成と内容の取扱いが指定されたため、それ以前にあった小学校毎の外国語活動のばらつきはある程度抑えられ、問題となりにくくなってきた。その代わり、今度は、5, 6 年生の小学校外国語活動においては、特に音声を中心として外国語を用いたコミュニケーション能力の素地が育まれ、「聞くこと」、「話すこと」の 2 技能を中心としたそれらの素地を踏まえ、中学校では、4 技能のバランスの上にコミュニケーションの基礎が育まれることが目標となった (佐藤, 2014)。この場合には、アルファベット等、英語の文字の読み書きや単語の読み書きなどが、小学校と中学校の間でどのように扱われるべきなのかが問題となり、また、小・中においてこの点で円滑な接続がうまく行われるかどうか小・中双方の英語担当の教師にとって大きな課題となる。特に今後、次期学習指導要領における英語教育の強化に伴い、英語が小学校で教科化されると、この問題はさらに深刻になるであろう。その他、英語教育に関する「楽しさ感」、つまり情意的側面の育成についての小学校から中学校への影響も重要な問題となる (佃, 2007: 1)。以上のように、現在、あるいはまた今後の日本の英語教育界においては、小・中連携の問題は教師にとってはかなり大きな関心の的になっている。ところで、高橋・柳 (2011: 223-224) は、小学校外国語活動と中学校英語教育の指導内容には、「相違点」、あるいは「段差」が存在し、円滑な両者の連結のためにはその「段差」を最小限にする必要があるという。その「段差」をなくすための指導内容として提案していることは、1 つには、定型表現から自由度の高いコミュニケーションに繋げることが重要だということで、例えば、小学校で体験した会話を、中学校で、「自己表現活動」として、自由度の高い会話ができるようにしたり、小学校で学んだ定型化した会話を、中学校での実際の様々な状況での会話や使用場面に繋げることが有効だとしている。もう 1 つは、音声を中心にした指導から文字・文法指導へつなげることを重視し、例えば、小学校の体験的な活動を通して音声として慣れしんだものを、中学校では、言語で理解を深め、表現の幅を広げたり、また、小学校では、音声で慣れ親しんだ定型表現の会話文を中学校では文字で提示し、その文構造 (語彙の並べ方、活用) を理解させること等が重要であることを述べている。

以上述べたように、数多くの英語教育に関する有識者や実践に携わる教師からも英語に関わっての小・中連携の重要性の声が挙がっている。それに伴い、実際に同じ小学校から児童が進学をする中学校区において、外国語教育に関して小・中連携に実際に取り組んでいる中学校の全中学校区数に占める割合は、文部科学省の発表した「平成 23 年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (B 票) の結果」によると、平成 21~23 年の間で 55.5%, 66.3%, 72.4% と推移し、関心の大きさは上昇してきている。ただ、残り 3 割は未だ何らの連携には取り組まれていないという現実がある。また、2010 年に岐阜市内の小学校、中学校教員を対象とした山口・巽 (2010: 204) のアンケート調査においては、小中連携の必要性に対する意識について、小・中共に 90% 前後の教員が小・中連携が必要だと考え、特に中学校教員の方が連携は重要であるという認識が高いという結果が出た。また、小・中相互の授業参観の有無、さらに小・中相互の研究会参加の有無については、小・中学校の英語科教員の 80% が相互の授業参観を行った経験があると述べており、70% 以上の中

学校英語科教員が小学校英語活動の研究会等に参加経験がありとしていた。ただしその一方で、「小・中連携を考える上で、最も基本となる自らの勤務校区内における小・中連携は、十分に行われていないという実態も同時に明らかになった」(p.208)ということであった。

以上の様に、児童を送り出す側の小学校教員も児童を受ける側の中学校教員も両者とも英語教育に関しての小・中連携の意義や重要性は認識していることが分かる。そうした連携の試みも進んでいるようであるが、しかし、両者の意識のずれや日常業務の多忙さゆえになかなかその機会が多くは持てない、あるいは進んでいないとの報告もある(樋口他, 2013:183-184)。では、次に、具体的に、英語教育に関する小・中連携とは、どのような連携内容の種類や連携方法があるのだろうか。そのいくつかをここで提示してみたい。

英語教育に関する小・中連携の内容の枠組みとして、佃(2007:7)が提示している次の4種類(4分野)が妥当なのではないだろうか。その4つとは、①小・中の英語教育間の「情報共有」、②英語の授業の相互「交流」、③小・中の5年間の発達段階を見据えた系統性のある共同「カリキュラム」の作成、④小・中の連携の進め方を議論するための連携「組織」の形成である。まとめると、連携のキーワードとして、「情報共有」、「交流」、「カリキュラム」、「組織」の4つが考えられると思われる。高野・加藤(2014:140-141)では、この内の3つを定義し、「情報交換」については、小・中の学校相互の授業参観や年間指導計画の交換等、互いの取り組みの情報交換を指し、「交流」とは、情報交換を踏まえて、互いの学校で合同・相互授業を行うことや、授業研究会や研究協議会、指導方法の検討会の実施などが含まれる。「カリキュラム」については、外国語活動と中学校外国語科との連携したカリキュラムを主に作成することとなる。なお、残りの「組織」については、以上に挙げた情報交換や授業交流、さらには共同カリキュラムの作成の小・中の連携を組織する母体を作ることの意味し、例えば、小・中の教員で組織される連携推進委員会などがこれに当たる。ここに掲げた情報交換を小・中で行うことでは、例えば、小学校で教えた内容が中学校でどのように教えられているのかを小学校教員は把握ができ、また、中学校教員の方は、小学校での外国語活動の状況を知れることで、児童が中学校に入る時点でどのような態度や能力を持っているのかという実態が把握できるというメリットがある。このようにして、様々な学校で現在、具体的な小・中連携が実際に行われているわけだが、その具体的な取り組みの内容として平成23年度に仙台市内の1つの小学校と1つの中学校が実際に行われた事例があるという。それは以下の6つがあったようだ(遠藤, 2016:12)。それは①小・中担当教師相互の授業参観、小学校での小・中教師のTTの授業、②小・中相互の年間指導計画の提示、③小・中のカリキュラムの照合(これは小学校で行う)、④教材の共有(小学校の教材を中学校で使うこと)、⑤小学校外国語活動への理解や研修内容の共有、⑥児童・生徒の交流・交流授業、である。これを見ると、かなり網羅的で系統的な小・中連携の形であることが分かる。

なお、2つの教育段階が英語教育について連携することは確かに重要なことではあるが、こうした小・中連携については拙速に行うのではなく、数年の時間を掛けて徐々に相互の関係性を築くことの重要性を指摘する北海道教育大学附属釧路小・中学校の実践に触れた木塚(2008)の研究がある。その附属釧路校では、3年計画の連携で最後に相互カリキュラムの作成まで行くプロセスが取られ、1年目には、学校間の信頼関係を築くための期間とし、相互授業参観や教員間の意思疎通を行い、2年目には連携を意識した合同授業を行う等、連携内容や方向性を模索する中で、互いに協力して実践を行う素地を作る時期とする。最後の3年目は、連携の基礎を確立し、小・中一貫カリキュラムの構築を試み、そのための問題点や課題を洗い出す時期としている。こうした時間を掛けた連携のプロセスの提案は、これからの各学校の具体的な小・中連携プランとして良い参考になると思われる。

さて、以上、英語教育における小・中連携についての諸側面をここまで見てきたわけだが、これ

から、本論考の中心テーマである、附属小学校と中学校の連携事業の実際である合同授業のことに入って行きたいと思う。具体的な状況に入る前に、過去の英語の小・中合同授業の実践例にこれからいくつか触れてみたいと思う。それによって、本論考の実践例の特色を後程明確にしてみたいと考える。

### Ⅲ 英語教育の小・中連携事業，特に小学校と中学校の合同英語授業の事例

ここでは、英語の小・中連携の一環としての小・中合同の英語の授業の事例を3つ挙げることにする。

まずは、岐阜県の公立学校のケースである（巽，2016）。この事例は、同じ校区内の小学校6年生と中学校1年生のものである。中学生のミッションは、小学生の興味・関心に合わせて中学校の良いところを紹介することで、小学生の方は、先輩たちから中学校生活の情報を得ることである。まず相互に英語で自己紹介をし、その後、小学生が自己紹介用のカードを提示しながら、やはり英語で好きなスポーツを中学生に伝える。そうすると、中学生が写真などを用いて小学生の好きな部活動について英語で説明し、その他、好きな教科などの情報交換を相互に英語で交わすのである。これらのやり取りにおいては、中学生が小学生との会話を主導し、小学生は一生懸命暗記してきた英語で中学生に話しかける。小学生の使用する英語は、これまでの外国語活動で慣れ親しんできた表現に限定したものととなっている。

次に、仙台市内の小学校と中学校の間の合同授業の事例を挙げる（遠藤，2016）。この事例は小学6年生と中学1年生のもので、小学校の担任と中学校英語科教師とのTTの授業となっている。テーマは「My Dream - 将来の夢」で、小・中混合の4人から5人のグループを作り、自己紹介と自己の夢を語り合う活動をする。まずは互いに自己紹介をし、好きな物などの情報交換をしながら、中学生が親しみやすい雰囲気作りをする。次に、児童と生徒各自が自分の夢についてのヒントが書かれたカードを手にし、ヒントを与えながら相手に夢の職業を当てさせ、最後にしっかりと自分の夢は何かを伝えるのである。授業における目標表現は、“What do you want to be?”と“I want to be ~.”と“Why?”と“Because ~.”であった。この対話モデルのデモンストレーションは中学生が行い、その後、夢の伝え合いが続くことになった。ここでも、中学生は小学生を積極的にリードし、会話を継続させ、例えば、理解できそうな質問をしたり、小学生の発話にリアクションを返したりした。一方、小学生も学習した英語を使って自分の夢を伝えようと努力していたようだ。この合同授業での小学生、中学生それぞれの狙いは、小学生の方が中学生の英語を聞いて憧れや信頼感を彼らに寄せ、中学校英語への期待感を高めることであり、また、中学生の方は、小学生をリードすることで、自分の英語力への自信や英語を学ぶ意義を再確認することであった。さらに、この合同授業で追求したことは、「コミュニケーションとは何か—相手意識を持って聞く、話す、積極的に関わる—ということを通じた小中の9年間で育む」（遠藤，2016:13）という教育の視点を実現することを意味しており、特に相手を意識したコミュニケーションのやり取りということが強調されている。

最後の事例は、北海道教育大学附属函館小学校・中学校の合同授業である（北海道教育大学，2013）。この事例は、「Let's Enjoy Shopping at Fuzoku Market!」というテーマの下での国立大学の附属小学校6年生と附属中学1年生による合同授業であった。この合同授業によって期待できることは、まず、両学校の児童・生徒の間に英語学習への意欲が高まることにある。これは、英語での交流により、英語でコミュニケーションを図る楽しさが実感でき、それによって英語学習への動機が高まることになる。また、もう1つの期待は、交流による人との関わりにより、互いを尊重する態度が

滋養されることであった。そして、さらに、グローバル化が進行する社会においては、様々な相手、自分と年齢や学年の異なる人や様々な種類やレベルの英語を話す人と交流が求められることがあり、今回の授業はそれらに対する自然な機会になることが期待されていた。

具体的な活動の内容は、英語で聞いたり話したりしながら、グループで手分けをして欲しいものを買集めたり、売ったりするというもので、これを小・中混合のグループで実施した。小学生は欲しいものを買集める役で、“～, please.” や “How much?” や “Here you are. Thank you.” などの表現を使った。中学生は売る側の役で、相手が欲しいものとそれらの値段などを伝え合う活動をしながら、小学生とコミュニケーションを取る。使う表現は、“Hello! May I help you?” や “What would you like?” や “Big or small?” やさらには “Here’s your change.” などであった。

以上の経験を経て、小学生は、「間違っただけで英語を使ったが楽しかった」、「最初は不安だったが、中学生がやさしく接してくれたため、楽しくなった」、「中学生との交流が新鮮だった」との感想があり、また、中学生には、「異年齢の仲間と関わることで、普段用いている言葉が通じないことを実感した」、「小学生に相対することで、言葉の言い換えが必要になった」、「小学生に負けられないと思い、自分の英語力で何とかしようと思った」という感想が表れた。いずれにせよ、初期の期待あるいは目標がある程度達成された満足できる実践になったようだ。

#### IV 附属小学校と附属中学校の英語の合同授業に関わるこれまでの経過

今年度の附属小学校と中学校との合同授業は2月に行われたわけだが、実は2年前の2014年の12月にも一度、両校の合同授業はすでに行なわれている。当年の公開授業の折、中学校1年生が三人称単数現在形を文法の目標にして、生徒が自分達で独自に「ゆるキャラ」を考え、その紹介文を英文で書くという活動を課題として行なった。合同授業では、その「ゆるキャラ」の英語の文章を小学生に聴かせて、内容を理解させ、その「ゆるキャラ」や「ゆるキャラ」についての中学生の行ったプレゼンテーションの評価を日本語でさせるというものであった。この授業では、中学校の英語科教員とALTが主になって授業を行った。中学生は、なるべく分かりやすく丁寧に、そしてジェスチャーを交えて小学生に説明をした。それに対して、小学生の方も、分かりやすい英語での説明を受け、英語の楽しさを感じたり、英語の学習の意義を感じたようだ。一方の中学生も、英語を分かりやすく説明することの難しさを感じ、またさらに自分の英語力を伸ばしたいという気持ちで自己の英語学習への動機づけにつながったようだ。ということで、両校の合同授業の意義を強く感じ、本年度の再度の小・中の合同授業を計画・実施することに至った。

この合同授業を行う数年前から、附属小学校の外国語活動担当の教員と中学校英語科教員との間で小・中連携の可能性を模索して、数回に亘りミーティングを行なってきた。その後、中学校の公開研究会に附属小学校の教員が参加したり、研究会に参加するなどする内に、中学校教員も附属小学校の公開研究会での外国語活動の授業や研究に関わる中で両者の連携を深めていった。こうしたプロセスの中で、中学校の英語科教員とALTが両校の児童・生徒を対象にした合同授業を主導する授業を行うところまで来た。連携については、萬谷他(2011)より、直山木綿子のいう小・中連携の中で最も効果が期待されるのが小・中の交流授業を行うことであるという意見を知ったことや柏木賀津子による小学生の英語学習についてのメリットとして、英語を聞いて分かる言葉を拾う習性や間違いに寛容であること、さらには、場に応じて包括的に学ぶ傾向があることなどを知ったことが交流授業の実施をさらに後押しするきっかけとなった。つまり、小学生も中学生も双方の言葉のやり取りの中で、より年齢が近い関係での活動ということで、教師との授業以上に言語学習におけ

る情意フィルターを下げる働きが増すであろうと予想したわけである。

さて、こうして2016年の本年も本附属学校では小・中による交流授業の実施が企画されたわけだが、本年度は、一昨年前の反省を踏まえて、次の諸点に考慮しながら行なうことにした。1つは、一方が活動の主導権を握り、一方が受身的な立場に終始するもよりも、共に英語に関係する何かを作り出す活動の方が学び自体が大きいこと、2つ目に、生徒や児童の英語レベルよりも少し上の課題のハードルを用意したり設定する方が英語力が伸びる可能性があること、3つ目に、言葉を伝える相手を意識しながら、即興性や気持ちやメッセージの伝わりが大きい活動の方が、伝達能力やその意欲が伸びると思われること等、であった。

ということで、以下、本年度の両校の交流授業の様子を報告してみたい。

## V 実際の附属小学校と附属中学校の英語の合同授業の状況

まず、合同授業についての基本的情報を述べる。合同授業は、附属小5年生の3クラス、附属中2年生の3クラスに対して行われ、授業担当者は、中学校英語科教員（筆者）とALTの2人であった。授業は、2016年2月に3回行われた。3回の授業はそれぞれ異なるクラスの組み合わせであった。

授業のねらいは次の2点で、①小学校の外国語活動と中学校の英語授業の接続を図る（小中連携）、②小学生と中学生、それぞれにとってメリットのある交流活動について模索する、であった。なお、授業に当たって事前に準備するものは、教師側は、ストップウォッチとワークシートで、生徒側は筆記用具であった。

次に授業の流れ（活動概要）を示す。それは以下のようなものだった。

### 1. Greeting and Warm up・・・5分

- ・ALTによるice breaking

### 2. Opening activity・・・10分

- ・教師2人による自己紹介のデモンストレーション。
- ・互いの自己紹介(Self-introduction)（全体で）。
  - 自分の名前と好きなものを言う。
  - 中学生から始め、終わったら小学生が行う。中学生は自分の好きなものを小学生も好きかどうか質問する。小学生もできれば質問してみる。

(Ex.) Hello! My name is Yuko Ohya. I like strawberries.

Do you like strawberries? Nice to meet you!

### 3. Make groups・・・5分

- ・これ以降の活動グループをつくる。人数調整のゲームをやりながら、次第に基準になるグループになっていく。

### 4. Skit (Shopping version) を作ろう・・・10分

- ・以下のModel dialogueを参考にして、資料1に載せてあるGoing Shoppingの空欄をSome samplesの語で埋めて(samples以外の語を使っても可)、Skitを共同して作らせる活動をさせるが、その作成のための要領も説明する。Skitは小学生と中学生が力を合わせて協力して作っていくが、作ったSkitは、まず中学生が覚えて、みんなの前で発表をする。なお、以下のModel dialogueは、小学校英語活動のHi, friends!のレベルに取って合わせたもので

あった。

(Model dialog)

Clerk: Hello. May I help you?

Kevin: Yes, please. I'm looking for a jacket.

Clerk: What color are you looking for?

Kevin: Something dark.

Clerk: How about this green one?

Kevin: Oh, that's cool. But it's too small for me.

Clerk: Shall I show you a bigger one?

Kevin: Yes, please. Oh, this is nice. How much is it?

Clerk: It's 8,000 yen.

Kevin: O.K. I'll take it.

- ・ 共同の Skit 作りについては、Skit の内容を小学生が作り、その英語を中学生が作るなど、役割分担をしたグループもあった。

#### 5. Skit (Shopping version) 発表しよう・・・15分

- ・ 活動のルールの説明

- グループで作った Skit を発表する。…発表した場合は2ポイント獲得。
- ほかのグループの発表を聞く。
- 内容を聞き取り、小学生中学生共に内容を把握する。
- 小学生が理解できていなかったら、中学生が教える。
- 教師からの発表内容に関わる質問に答える。…正解したらポイント獲得。
- 誰が答えてもよいが、中学生が答えた場合は1ポイント。
- 小学生が答えた場合は3ポイント。(原則として英語で答える。)

- ・ 発表された Skit の内容説明については、時間節約のため、英語科教員によって行われた。

#### 6. まとめ ～ Closing・・・5分

なお、授業の後には、交流(合同)授業のふり返しシートを配布し、児童・生徒にABCで評価をしてもらった。自己評価は4観点で、その観点は小学生と中学生とで異なっていた。まず、小学生の4観点は、①中学生と元気にあいさつができた、②中学生や小学生の仲間と協力し、Skitづくりをすることができた、③他のグループの発表を理解することができた、④「英語の学習」に、興味・関心を深めることができた、であった。中学生の4観点は、①仲間と協力し、積極的にSkitづくりをすることができた、②声の大きさ、スピード、発音、間の取り方、アイコンタクトに注意して発表できた(効果的に見せることができたか?)、③発表内容は、理解しやすいものにできた(自分たちの発表に興味をもたせることができたか?)、④「英語の学習」に、興味・関心を深めることができた、であった。最後の観点だけ小・中学生に共通したものであった。当日の以上の4観点のふり返りの自己評価については、小学生は、①と③の項目にBが多少多いものの、残りの項目はほぼAの評価をつけていた。当日、年上の中学生と顔見知りをし、うまく挨拶ができなかったケース、また、Skitの発表の折に、他のグループの発表をうまく理解できなかった小学生が多くいたようだ。一方、

中学生の自己評価については、②と③にBが多かったが、残りの①と③はほとんどの者がAの評価をつけていた。中学生については、小学生と協力してうまく Skit 作りができたものの、Skit の発表パフォーマンスがうまくいかなかったケースや自分達のパフォーマンスを小学生に理解させるという意味で課題を感じた者が多かったようだ。いずれにしても、小学生も中学生も、「英語の学習」に興味・関心を深めることができたかという点についてはかなりの割合で達成できていたようだ。

今回の合同授業を終えての感想を小・中学生にそれぞれ尋ねたので、そのいくつかを以下に記したい。

小学生の感想：

- ・中学生が優しく教えてくれたので、話しやすかった。
- ・少し緊張したけれど、中学生がリードしてくれたので、分かりやすかった。
- ・中学生が英語でペラペラと話していてすごいと思った。
- ・中学生が楽しそうに英語を話していたので、中学校での英語がとても楽しみになった。
- ・これからももっと交流授業をやりたい。

中学生の感想：

- ・小学生の意見を聞きながら、理解しやすい Skit を作ることができて良かった。
- ・アイコンタクト、身振り手振りも活用し、コミュニケーションが取れて良かった。
- ・小学生に教えることで、知識が定着すると感じた。
- ・英語を教えることの難しさを感じ、分かりやすく楽しく教えることの大切さを学んだ。
- ・小学生との交流を通して、相手を意識したコミュニケーションの大切さを実感した。
- ・とにかく、貴重な体験になった。また交流授業をしたい。

## VI 考察

今回の合同（交流）授業に関しては、概ねねらいとしたことが達成されたと思う。主に彼らの授業のふり返りの感想からであるが、まず、小学生においては、中学生の英語力に魅力を感じ、中学校に上がってからの自己の英語力の伸長を期待し、英語学習により強い動機を感じる児童が多くいた。今後の英語学習に期待を持つことができたということを以って、今回の授業の意義を感じることができる。次に、中学生については、相手を意識したコミュニケーションの大切さを感じ、また他者に英語を分かりやすく提示することの困難さも感じていた。アイコンタクトやジェスチャー等、効果的に英語を伝える方略的な側面の重要性を意識し、さらに自己の英語力の伸長の必要性を感じる生徒が多かった。いずれにしても、小・中学生双方がこの合同授業をもっとしたいと感じてくれたことに本事業の達成感を持てたり、意義を筆者達も感じることはできたのは幸いであった。

最後に本合同授業を通して筆者達が感じた反省を書いておきたい。

まず、合同授業において取り上げる課題は、中学生には、それまでの学習をふり返れる内容・確認できる内容が良いと考えた。具体的には、彼らの不安を除くものや彼らが自信をもった状態での活動ができるもので、小学生にきちんと教えたり、伝えられるものを選ぶべきである。また、活動においては、彼ら自身のふり返りという行為が重要となる。そして、連携、合同授業を通して、さらに自分の英語力に自信がつき、英語学習への意欲が高まると良いと思った。一方、小学生は、課題について、ちょっと彼らにとってハードルを挙げた内容が良いと考える。つまり、わかっていることではなかなかモチベーションややる気を上げにくい感じがした。また、小学生の「知ろう！」「学ぼう！」「教えてもらおう！」という気持ちが、中学生と小学生、お互いに良い関係をつくり、学習が進められる環境を作った。それにより、小学生も学びを実感でき、また、もっと学びたいと

いう気持ちへつながっていくものとする。

活動の進め方については、グループ内が同性同士（男子同士だけ、女子同士だけのまとまりになる）だけでまとまらないように工夫が必要だと思った。そのためグループ構成も1つのグループに男女が混ざるように工夫した。また、Skit 作業における Work sheet はグループ全員配布するのではなく、1枚だけ配布し、それに全員が集中して共同作業がしやすいように工夫する必要があった。最後に、生徒による Skit の発表については、これは単なる発表ではなく、Listening comprehension をすることが重要な活動でもあることも強調することが大切だと感じた。

## Ⅶ おわりに

今回の合同授業については、企画や実施に関しての調整がかなり難しい面もあったが、小学校側の外国語活動担当教員の赤井先生、堀田先生（前任者）の活動に対する理解と協力のお陰、さらには活動を盛り上げることに尽力してくれた ALT のピーター先生のお陰で何とかこの形を達成できたと思う。心より感謝申し上げたい。また、こうした合同授業については、小・中学生双方が活発に活動できる適切な課題の選択や指導する教員の好ましい形態、さらには、こうした授業の効果の検証の仕方など、課題はまだたくさんある。だが、今回の子ども達の様子を見て、こういう事例を今後もっと積み上げて、意義のある形を模索することは教師、生徒双方に価値のあることだと痛感した。こうした事例が今後も増えることを期待したい。

### 【引用文献】

- 伊藤光・宮野健（2013）「未来をつなぐ～小学生と中学生の合同英語授業からみえるもの～」『平成25年度 小中連携授業実践記録』pp. 13-28, 北海道教育大学。
- 遠藤恵利子（2016）「中学生と小学生が学び合う外国語活動」『英語教育』Vol.65, No. 4, pp. 12-13, 大修館書店。
- 木塚雅貴（2008）『小・中連携を「英語」ではじめよう！－「小学校英語」必修化へ向けて』日本標準。
- 佐藤静香（2014）「英語教育における小中連携－小学校外国語活動の授業づくりの視点から－」『山形大学大学院教育実践研究科年報』Vol, 5, pp. 236-239.
- 高野美千代・加藤宏（2014）「小学校外国語活動における小中連携の課題と方法」『山梨国際研究 山梨県立大学国際政策学部紀要』No. 9, pp. 139-150.
- 高橋美由紀・柳善和（編）（2011）『新しい小学校英語科教育法』 協同出版。
- 巽徹（2016）「小学校英語 現状ではどんな変化が起こっているか」『英語教育』Vol.65, No. 4, pp. 10-11, 大修館書店。
- 佃由紀子（2007）「小中連携の英語教育の在り方に関する研究－中学校1年生の英語学習に関する意識調査を通して－」『高知県教育公務員長期研修生研究報告』pp. 1-14, 高知県教育センター。
- 樋口忠彦他（編）（2013）『小学校英語教育入門』 研究社。
- 山口美穂・巽徹（2010）「英語教育における小中連携に関する一考察－「小学校英語活動」に関する岐阜市の小中教員の意識調査－」『岐阜大学 教師教育研究6』pp. 203-213.
- 萬谷隆一（編）（2011）『小中連携 Q&A－小学校英語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』 開隆堂出版。

1. 資料

1. Skit 作り用の Work sheet

Going Shopping.

Class(        -        ) No.(        )  
Name(        )



1. Fill in the blanks with the words below.

A) Hello. May I help you?

B) Yes, please. I would like \_\_\_\_\_(a)\_\_\_\_\_.

A) What \_\_\_\_\_(b)\_\_\_\_\_ would you like?

B) Something \_\_\_\_\_(c)\_\_\_\_\_.

A) How about this/ these \_\_\_\_\_(d)\_\_\_\_\_ one/s?

B) Oh, that's cool. But it is too \_\_\_\_\_(e)\_\_\_\_\_ for me.

A) Shall I show you a/some \_\_\_\_\_(f)\_\_\_\_\_ one/s?

B) Yes, please. Oh, this is nice. How much is it (are they)?

A) It's (They're) \_\_ (How much?) \_\_ yen.

B) Ok. I'll take it (them)./ Oh. I'm sorry. Maybe next time.

2. Some samples.

(a)	(b)	(c/d)	(e)	(f)
a bag	color	bright	small	bigger
a jacket	design	cool	big	smaller
a hat	brand	Mike	bright	darker
a t-shirt	shape	Toyota	dark	brighter
a car	size	big	light	heavier
a bicycle		strong	heavy	lighter

2. 実際の活動の様子



小学生と中学生のあいさつ



互いの自己紹介



Skit 作りの教師による説明



Skit 作りの作業の様子

